



Title	プラトン『饗宴』導入部における語りの構成
Author(s)	里中, 俊介
Citation	フィロカリア. 2018, 35, p. 13-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プラトン『饗宴』導入部における語りの構成

里 中 俊 介

- 序
- 一、導入部の構成
 - 二、アポロドロスとグラウコン
 - 三、哲学への導き
 - 四、アポロドロスとアリストデモス
 - 五、語り継がれるソクラテス
 - 六、『饗宴』における語り
結びにかえて

序

『饗宴』はプラトンの著作の中でも際立った特徴を有した作品である。『饗宴』の主要な部分は悲劇作家アガトンの家で行われた祝宴を舞台に、参加者たちがそれぞれ順番にエロースに対する賛美の演説を行うという内容である。また、その後に会場へと乱入してきたアルキビアデスによるソクラテス賛美演説も加わる。これら主要演説部分の構成自体もさることながら、注目すべきは、それに先立

って導入部分が存在し、その内容が比較的複雑な点は他の対話編に見られない『饗宴』の特徴である。⁽¹⁾ 複雑な点というのは、『饗宴』はアポロドロスという人物がアリストデモスという人物から聞いた話を語るという間接的報告という体裁をとっており、またその伝達経路が一樣でないことである。この複雑さは「ある意味で、Logosによって整理しきれはるはずない、現実の在り方そのものの複雑さを反映している」⁽²⁾ と言えるかもしれない。しかし、アリストデモスは当時の祝宴への参加者であり、目撃者である。なぜその本人が語るのではなく、紆余曲折の後にアポロドロスに報告者としての役割が与えられているのか。本発表はこの導入部分の複雑な構成はプラトンが意図したものであると考え、これを分析し、その意図は何かを探るものである。

一、導入部の構成⁽³⁾

導入部の考察へ入る前に、まず『饗宴』の作品全体、および本稿

で問題とする部分の構成を簡単に紹介しておきたい。『饗宴』の舞台は悲劇作家アガトンの自邸で開かれた祝宴である。レナイア祭で

悲劇作品が優勝したことを祝った宴の二日目¹が舞台とされており、

ソクラテスをはじめとして多くの実在の人物も登場している。この作品の主な内容は祝宴の参加者たちによるエロースへの賛美演説であり、また、のちに乱入したアルキビアデスによるソクラテスを賛美する内容の語りである。エロース賛美はバイドロス、パウサニ阿斯、エリユクシマコス、アリストファネス、アガトン、そしてソクラテスによって行われる。ただし、ソクラテスは若いころにディオティマという女性から受けたエロースに関する教えを披露する。

以上のような内容の主要部分に先立って、『饗宴』は導入に当たる部分を有しており、すでに述べたようにその内容が複雑な点に特徴がある。そこでは、これから語られる主要部でのエロースとソクラテスへの賛美演説が、誰によって聞き取られ、伝えられたのかが明らかにされている。つまり、アガトン邸での祝宴について、直接その場面の描写が始まるのではなく、間接的報告であることがあらかじめ読み手に提示されるのである。そして、その間接報告の伝達経路の問題を含め、『饗宴』の主要部を成す演説が語られる経緯が、アポドロスとその友人たちとの会話の中で明らかになる趣向なのである。そこにグラウコンとのエピソードなどが織り交ぜられることによって描写の複雑さが増していき、読み手にとってはその関係性を一度では把握しにくい内容となっている。そこで、以下では問

題の導入部をその流れに沿って概観する。

二 アポドロスとグラウコン

導入部分の複雑な構成はアポドロスとグラウコンの会話部分に集中しているため前後の文脈について言及されることは比較的少ない。そこで、以下では『饗宴』の場面の展開上アポドロスとグラウコンの会話が入ることの意味を確認していきたい。

『饗宴』は、やや唐突にアポドロスによる友人たちへの次のような言葉で始まる。

引用 1

「君たちがたずねていることについて、ぼくには練習ができていないとは思えないね。」²

(Sym. 172a1-2)

この直後にアポドロスがグラウコンと数日前に出会った場面へと話が移り替わるのであるが、そのようなエピソードが挿入される目的は、端的には「練習ができていないとは思えない」という言葉の説明である。グラウコンとの会話が終わった直後にアポドロスが同様の表現で「だから、はじめに言ったように、ぼくはおたずねることについて練習ができていないわけではないのだ。」と繰り返していることから、それは明らかである。では、アポドロスがこ

のエピソードを披露した意図が、「練習ができていないとは思えない」すなわち「練習ができている」理由の説明だとすれば、エピソードの複雑な内容がどのように理解されるべきかを確認していきたい。その際に、グラウコンの問いかけに注目することにする。

グラウコンの第一の問いは以下のようなものである。

引用2

「教えてくれないか、君自身がその会合には出ていたのか、それとも出ていなかったのか。」

(*Symp.* 172b7)

グラウコンの最初の問いは、話題となっている会合にアポドロスが直接立ち会った目撃者かどうかを問うている。この問いに先立ってグラウコンは自分の現状持っている情報を明らかにしているが、そこでは次のように言われている。

引用3

「アガトンのところでの会合のことを詳しく聞きたいと思っ
てね。ソクラテスやアルキビアデス、それからその時に宴に同席
していた他の人たちも加わったという。あの会合の様子をね。
ほかでもない、彼らの語ったもろの恋の話について、それ
らが一体どのようなものであったのか、それをすっかり聞いて

みたいのだ。というのは、ある別の人が、ピリッポスの息子ポ
イニクスからその内容を聞きおよんで僕にいろいろと話してく
れたんだが、その人は、君もまたこうしたことを知っている
と言っていたからだ。いやそれだけではない、こうして君を呼び
止めたのは、その人がそもそもはつきりしたことを何も語るこ
とができなかったからなのだ。」

(*Symp.* 172a6-b5)

この発言の前半部分はグラウコンの現状の認識を示している。アガ
トン邸での祝宴にはソクラテスとアルキビアデスなどが出席してお
り、^⑥そこでは「恋に関する話」が取り交わされたというところまで
がグラウコンが知りうる限りの情報のようである。他方、後半部分
では情報源と伝達の経緯が明らかにされている。その情報の伝達経
路はポイニクスという人物から名前すら不明の「ある人」を経由し
てグラウコンに至ったものであるが、その「ある人」は「確かなこ
とを言うことができなかった」^⑦ため、グラウコンはソクラテスの仲
間であるアポドロスを頼ってきたという経緯なのである。

こうした描写からグラウコンに祝宴の情報が届く時点ですでに二
人の人間を経由していることが分かる。一般的に口承の伝達過程に
介在する人間が増えるほど、元の情報との誤差は大きくなると考え
られるので、グラウコンに至った時点で確かな情報がもたらされな
かったとしても不自然ではない。すでにグラウコンの持っている情

報は、後にアポロドロスが語る物語内容から変質しているか、あるいは部分的、断片的なものであることが示唆されている。

このように、グラウコンの有している情報の不完全さが明らかにされたのち、グラウコンは先の引用2の問い (172a) をアポロドロスに投げかけている。その意図はアポロドロス自身がその場に居合わせており、直接の目撃証言が可能ではないかと期待してのものであることは明らかである。また、アポロドロスとソクラテスは「仲間である」⁽⁸⁾のだから、たとえアポロドロスが祝宴には出席していない場合でも、グラウコンに情報をもたらした「ある人」よりも、アポロドロスの方が、グラウコンにとって確かな情報源になる。

グラウコンはアポロドロスが直接証言をもたらしてくれるものと期待して問いを投げかけているが、アポロドロスは、自分が出席していない理由を以下のようにグラウコンに説明している。

引用 4

「君は知らないのか、アガトンがこの地を去ってからもう何年にもなるし、一方、ぼくがソクラテスと親しく付き合い始めて、あの人の語ることなすことのすべてを知ること、これを日々、自分の関心ごとにするようになってからまだ三年にもならないのだよ。ところであの人と付き合い始める前のぼくはといえば、行き当たりばつたりに気の向くままあちこち走り回りながら、しかもそれでいて、自分では何かをしているつもりでいた

のだが実際にはぼくは、だれよりもじめな人間だったのだ、そう今の君に劣らずね。何しろ君ときたら、哲学するくらいなら何でも他のことをすべきだと思っているのだからね。」

(Sym., 172c3-173a3)

この説明はグラウコンの問いに端的に答えるものではない。アポロドロスはやや回りくどい言い回しをしているが、主張しているのは「アガトンがアテナイを去って久しいこと」「自分がソクラテスと近い間柄になってまだ三年にも満たないこと」「ソクラテスと会う以前の自分は哲学することなど顧みず、じめな存在であったということ」という三点である。先の二点が間接的にグラウコンの問いに対する答えになっている⁽⁹⁾。つまり、アガトン邸の祝宴はかなり過去の出来事であり、また、自分とソクラテスの関係も三年前には始まっていなかったのであるから、自分は話題となっている祝宴には出席していないということなのである。

では、実際祝宴はいつ行われたのか。それがグラウコンのアポロドロスに対する二番目の問いとなる。それに対する両者のやり取りを以下に引用する。

引用 5

「それが催されたのは。僕たちがまだ子供のころで、アガトンが彼の最初の悲劇作品で優勝した折の事だ。(後略)」

「とすれば、ずいぶん昔のことらしいね。」

(Simp. 173a5-8)

このやり取りの中で『饗宴』で語られるアガトンのための祝宴が開かれた時期が判明しているが、注目すべきはグラウコンが「ずいぶん昔のことだと思われるね」と答えている点である。すでに暗に示されていた導入部における現在とこれから語られる物語の時代との隔たりがグラウコンの言葉によって明確に強調される。問題の祝宴が時代を隔てた過去の出来事であることが判明することで、情報源の重要度はより増し、その当時の記憶をとどめる証言者の存在が問題となる。グラウコンの関心は常により確かな情報をもとにした証言にあるため、続いて、次のような両者のやり取りが展開される。

引用6

「しかし、いったい誰が君にその話をしたのだ。ひょっとして、ソクラテス自身が話してくれたのか」

「ゼウスに誓ってそれは違うね」と僕は言った。僕に話した人というのは、ほかでもない、ポイニクスに話したのと同じ人物なのだ。アリストデモスとかいう人だったが、キュダテナイオン区の住人で、身は小柄、いつも裸足でいる男だ。彼がその祝宴に出席していたわけだが、ぼくの見るところ、彼はその当時、最も熱烈にソクラテスを愛する者たちの一人だった。とは

いえ、それでも念のため、ぼくは、彼から聞いた事柄のうちのいくつかの点を、その後ソクラテス本人に問いただしてみたのだが、ソクラテスは、アリストデモスが話した通りだと、ぼくに同意してくれたのだ。」

(Simp. 173a8-b6)

ここで、アポロドロスの情報源が明らかになると同時にグラウコンの情報源についてもその伝達経路の全体が明らかになる。どちらのルートも情報の源はアリストデモスという人物であって、彼は当時ソクラテスの熱狂的支持者であった事実が判明する。祝宴当時のソクラテスに関する事柄であれば、アリストデモスはアポロドロス以上に信頼に足る人物ということになる。しかし、すでにグラウコンによって述べられていたように、グラウコンはアリストデモスから直接話を聞いたわけではない。間に二人の仲介者を挟んだがために、その情報は十分にグラウコンまで届かなかったのである。その一方で、アポロドロスはアリストデモスから直接当時の目撃証言を聞いている。ここには情報源からの距離という問題において大きな差が存在している。アポロドロスとグラウコンが同一の情報源を持ちながら同一の事柄に対して伝達された情報内容に差が生まれたのは不思議ではない。また、アリストデモスの情報の確かさを保証するのは彼が直接問題の宴の場に出席していることである。じかに現場を目撃した人間による証言はグラウコンが第一の質問の際に期待

していたところでもある。また、さらに注目すべきはアポロドロスがソクラテスにアリストデモスから聞いた話の内容を確認し同意を得ている点である。グラウコンはソクラテスからの直接の証言に対する期待をアポロドロスへの第三の質問（引用6、173a）の際にあらわにしていた。アポロドロスはソクラテスから直接話を聞いたことを否定しているけれども、他者から聞いた内容をソクラテス本人に確かめているのである。ここにおいて、アポロドロスの話はいわば正当な継承過程を経て、開示される時を待っているということができるだろう。

以上、グラウコンとアポロドロスによる導入部に挿入されたエピソードの言説を展開に沿って見てきたが、グラウコンからの質問の主旨はアポロドロスの情報源の信頼性を確かめようとする点にあるとすることができよう。¹⁰ その意味ではソクラテスに近い人物を介した情報であればその信憑性は高まる。まして、ソクラテスの承認を得ているとなればなおさらである。グラウコンがアポロドロスによってそのことが告げられた直後に質問を切り上げ、道すがらその話を語りあおうと提案しているのは象徴的である。このアポロドロスへの質問とそれに対する応答の過程は、アポロドロスがこれから語ろうとする物語内容の信憑性が確認され、最終的にソクラテスによって正当性が付与される過程とみなすことができるだろう。

三三 哲学への導き

前章で確認したグラウコンとのエピソードをアポロドロスがまず提示したのは、自分は「練習ができています」ということを示すためであった。それは端的には街へ向かう道中グラウコンとともに語り合ったということ、すなわち予行演習が済んでいるということを示していよう。しかし、同時にグラウコン側の情報と比較対照された結果、アポロドロスの話は語り継ぎの経緯やソクラテスによる承認という点において信頼に足るものであることが明らかにされていた。そのことに起因する、いわば自信の表れが次のような言葉に表されている。

引用7

「だから初めに行ったように、ぼくはお尋ねのことについて練習ができていないわけではないのだ。ところで、もし君たちにも詳しく話す必要があるとすれば、ぜひそうしなければならぬね。」

(Symposium, 173c1-2)

ここにアポロドロスの語り手としての意識を見て取ることができる。「必要があるとすれば、ぜひそうしなければならぬね。」という言葉には、単に要請に応じて話をしようとするだけでなく、より

積極的な語り手としてのアポロドロスの意識が表れていると考えられる。そして、アポロドロスの積極性は「練習ができています」というだけではなく、語ろうとする話の内容にも裏打ちされている。アポロドロスは話を始める前に目の前の友人たちに向けて次のように語りかける。

引用 8

「実際僕という人間は、ほかの折でもそうなんだが、哲学に関する話となると、ぼく自身が話そうとあるいはほかの人から聞こうと、その話から利益が得られるなどといった考えから離れて、ただもう、それだけでとても楽しいんだ。けれども、何かこれとは別の話となると、つまり、とりわけ君たちがしているような、裕福で、金儲け仕事をする人たちの話となると、ぼく自身嫌気がさすばかりか仲間の君たちをあわれんでしまうんだ。なにしろ、君たちは何もしていないのに、自分では何かしているつもりになっているのだからね。」

(Sym., 173c2-d1.)

この後で『饗宴』の主要部分が始まり、その語り手はもちろんアポロドロスであるが、ここまでの会話の中では聞き手は「君たち」とだけ呼ばれており、素性ははっきりしない。しかし、アポロドロスの言葉から「裕福で、金儲け仕事をする人たち」であると推定さ

れ、哲学とは無縁な人々が想定されている。⁽¹²⁾

したがって、『饗宴』の主要部分は、アポロドロスによる哲学の勧めと見なすことができる。「哲学に関する話」という語の使用から、これから友人たちに語られる内容、つまり『饗宴』本編が哲学に関わるものであることが予告されている。グラウコンとの対話の中では、「恋の話」であつたものがソクラテスの承認を得たものであることが明らかにされた今、自覚的にそのように呼ばれていると考えてもよいだろう。ソクラテスによって哲学への目覚めを経験したアポロドロスにとって、ソクラテスから正当なものと認められた話は、積極的に語られるべきものとして意識されているということができる。

また、アポロドロスはただ使命感あるいは義務感によってのみ哲学的な話をしようとするわけではない。哲学を通じて他者と交流することの中に欲見を見出していることを明確に述べている。その一方で、利得や金儲けに関する事柄について語ることは嫌悪を示し、世俗的な関心の中にとどまっている友人に対して厳しい言葉を投げかけている。⁽¹³⁾ アポロドロスに言わせれば哲学をすること以外は「何もしないことと同じなのである。そのような相手に対してこれから哲学に関する話を語ろうとするアポロドロスは、相手を哲学的営みへと参与させるために「確かなこと」を伝えることが要求される。とりわけソクラテスによって認められた物語であればなおさらアリストデモスからの語り継ぎをうまく果たさなくてはならな

い。このように、アポロドロスは哲学することが有意義なものであることを、そこに生じる喜びとともに伝える語り手としての役割を担っており、その自覚を備えた存在であることが明確に示されているのである。

このように、『饗宴』冒頭の複雑な内容を持ったエピソードの挿入はアポロドロスによって意図的に語られており、それによって自身の語ろうとする哲学的言説の正当性を主張し、語り掛ける相手である友人への哲学的営みへの参加を促そうとする目的を有していると理解することができる。

しかし、導入部の記述は確かにアポロドロスによって語られようとする『饗宴』主要部分の内容が信憑性のある内容であることを印象付けるけれども、そうした印象を与えるにはあまりに錯綜した情報伝達のプロセスが提示されているようにも思われる。¹⁵そうしたプロセスが構築され、導入部において示されねばならなかった理由が別に考えられる必要があるだろう。そこで、次章以降ではアリストデモスからアポロドロスへ、そしてさらに友人たちへと連なる「語り継ぐ」という行為自体に注目して、その理由を考察する。

四. アポロドロスとアリストデモス

さて、アリストデモスからアポロドロスへの語り継ぎのプロセスについて考察する際、両者の違いに着目されることは少ないように思われる。両者は共にソクラテスによって哲学の道へと導かれソク

ラテスを信奉するという共通の性格付けが顕著なため、その異なる点には注目されにくい。¹⁷しかし、この両者が異なる「世代」を代表しているという点にはより注目されてよいと思われる。

先に取り上げて論じたが、アポロドロスとグラウコンの会話の中で、アガトンの饗宴がいつだったのかという質問が投げかけられていたのを思い出す必要がある（引用5 113c）。祝宴の開催時期に関するその質問自体は、アポロドロスの言説の信憑性、つまり情報源の信用性に直接かわるものではないにもかかわらず、グラウコンから発せられた質問であった。その質問によってアガトンの祝宴がかなり過去の出来事であることが判明したのである。それは、実際には紀元前四一六年に開かれたものであると考えられる。¹⁸一方で、アポロドロスたちがいる『饗宴』内部での「現在」は紀元前四〇五年から四〇〇年ごろであろうと推定される。¹⁹これはまだソクラテスが存命の時代である。アガトンの祝宴が、アガトンがレナイア祭で処女作によって栄冠を勝ち取った時のことだと聞いた際のグラウコンは「ずいぶん昔の事らしいね」という反応を表していた。また、アポロドロスはその出来事は自分たちが「まだ子供のころの事」²¹だと述べており、こうした描写からは読み手はたとえ出来事の日時を特定できない場合でも、アポロドロスとグラウコンにとってアガトンの祝宴が時間の離れた出来事だということが分かるように描かれている。つまり、アポロドロスとアリストデモスが違う世代の人間であるということが想定され描かれているとみていいだろう。ここ

では、アリストデモスからアポドロスへの語り継ぎが世代を超えて行われたものであることが読み手に告げられているのである。しかし、世代を超えるということは何を意味し、どのように機能しているのだろうか、次章では世代ということをソクラテスとの関係性から考察することとする。

五. 語り継がれるソクラテス

ソクラテスの生前の言動をいかに正しい仕方ですり継ぐかということは、プラトンにとっておそらく大きな課題の一つであったことは想像に難くない。間接的報告という形式の『饗宴』をそうした試みの一つとしてとらえることは、十分に可能であろう。⁽²⁾『饗宴』の執筆時期を正確に特定することは困難であるが、作品中の歴史的記述からの推定によれば、紀元前三八五年以降ではないかと考えられている。⁽²³⁾これはソクラテスの死後十数年以上が経過した段階であり、人々の記憶からもソクラテスの生前の姿が薄れつつある頃であったのではないかと考えられる。このような時代状況において、なにより一つとして書き残すことのなかったソクラテス像をいかに保存し、語り継ぐかということはより大きな課題であったに違いない。もちろん、こうした状況とは関係なく、ソクラテスの死後、その哲学的営みをいかにして継承していくことができるかは、プラトン自身が自らに問うていたところであろうと想像される。

このような観点から『饗宴』において、アリストデモスからアポ

ドロロスへとソクラテスに関わる言説が語り継がれる描写を眺めるとき、そこにはソクラテスを語り継ぐということにおいて生じる特殊な事情が反映されているように思われる。つまり、ソクラテスの死後において、その言動について知るにはソクラテスとの直接的交流体験を持つ人物から情報を入手するか、あるいはなんらかの記録媒体によるしかない。いずれにしても、ソクラテスという人物を象徴する対話的営みを直接経験するということは不可能であり、何らかのものに媒介された経験の中で、ソクラテスとは誰か、その哲学とは何かが問われ、伝えられなければならないのであったのである。

このように、ソクラテスを間接的に経験することが不可避な状況になりつつあったということが、アポドロロスとアリストデモスによる語り継ぎという状況設定と対応しているのではないかと考えられる。つまり、ソクラテスを直接経験した人々とそのような経験を持たない人々との境目において一つの世代の違いが生じているのであって、これは単に古い世代と新しい世代ということではない。アリストデモスは『饗宴』の本編においてソクラテスとともに居られども、アポドロロスはそのソクラテスとの体験の中には存在していない。常に語り継がれた事柄の語り手として、その外側にいるのである。このようにして『饗宴』という作品はアリストデモスからアポドロロスへと語り継がれたものを今度はアポドロロスが語り手になって「君たち」||「裕福で、金儲け仕事をする人たち」に向けて語る二重の間接的報告という形式が提示されているのである。

六、『饗宴』における語り

『饗宴』は、アポドロロスがアリストデモスの話を伝えるという形式になっており、アリストデモスは背景に退き、アポドロロスが主要な語り手となっている。その意味で『饗宴』においては、二人の語り手は重なり合っている。アポドロロスは基本的に「アリストデモスが語ってくれたように」語ると述べており、また、アポドロロスによる語りの中に「彼（アリストデモス）は言った」という文句が随時挿入されることで、アポドロロスがアリストデモスをなぞりながら語っていることが示されている。しかし、その一方で、二人の語り手の「ずれ」も作品の中に表されている。とりわけ象徴的なのは、エロースを賛美する演説を行った人物は『饗宴』に登場する人物以外にもいたのであるが、アリストデモスはそのすべてを覚えておらず、またアポドロロスもアリストデモスの述べたことすべてを記憶していないという発言がなされていることである。²⁵『饗宴』で様々な演説を披露するエロース賛美への参加者たちは、アリストデモスとアポドロロスによつて記憶のうちから選択された人物たちなのである。原体験の記憶は語り継ぎの過程で曖昧なものとなっていくのは必然であろうが、その一方で、語り手によつて何を語り継ぐべきかが意識され、あるいは無意識的にも記憶の劣化や変質によつても選択、改変されていく。しかし、その営みが情報の伝達の正確さを競うようなものでない限り、他方で新たな語り手の思考が

ながれて行く過程でもある。アポドロロスの語りの中に、アリストデモスの語りが登場してくることが示すのは、そのような過程の上に『饗宴』が成り立っているということを読み手に告げているのではないだろうか。

このように考えれば、導入部における語り継ぎのプロセスの提示は『饗宴』の語りの構造を示すと同時に継承と断絶に関する様々な可能性を示している。つまり、ソクラテスとの直接的な交流の場であったアガトンの祝宴での体験は、アリストデモスからアポドロロスを経て語り継がれ、読み手まで継承されていく場合があるのと同じ時に、グラウコンの側のルートのように、「確かなこと」は失われ、失われるということも十分にあり得ることを表している。また、継承されたアポドロロスの話自体も、「確かなこと」が保全されているという保証は最終的にはソクラテスの承認に拠っている。ソクラテスによる承認は、一方で『饗宴』主要部分の内容を正当化するように機能しているけれども、他方で、ソクラテスが承認したのは、アリストデモスの話の中からアポドロロスがソクラテスに尋ねた「いくつかの事」²⁶と言われており、それが『饗宴』のどこを指すかは判然としない。そのため、『饗宴』の何を語り継ぐべき「確かなこと」として考えるかは、読み手にゆだねられていると言えるだろう。

したがって、ソクラテスによる承認は、単に『饗宴』の内容の正当性や権威を保証しているのではなく、この作品も語り継がれるという動的過程にあるということを示している。アリストデモスとア

ポロドロスの語りの「重なり」と「ずれ」は、その語りがそのような運動の中で、多層な声として折り重なっているということを暗示していると考えられるのである。

結びにかえて

本稿では、『饗宴』における導入部が複雑に構成されている意図を明らかにするために、まず、その複雑さを生じさせる多様な情報を含むアポドロロスとグラウコンの会話を概観した。そして、その挿入エピソードが、後続するアポドロロスによる哲学への導きにおいてこれから語ろうとする話の正当性を強調する機能を果たしていることを確認した。しかし、それだけが目的であれば細部の複雑さや二重の間接的報告は必ずしも必要ではない。そこで、二重の間接性を作り出しているアポドロロスとアリストデモスの語り継ぎのプロセスに注目し、それが生み出す重層的な語りが『饗宴』においては意識的に描き出されていることを示した。このことが意味するのは、『饗宴』にはソクラテスの言説がそのまま受け継がれているというわけではない。むしろソクラテスを起点としながら、その言行を語り継ぐことによって知を愛するという営みに参与する者の声が層をなし、折り重なって作品が形成されているということを示しているのではないだろうか。

註

- (1) プラトンの他の対話篇の導入部との比較検討については、浜下昌宏『Praefatio ad Platonis Symposium―あるいは導入のロジック／レトリックについて―』、『神戸女学院大学論集』三六(一)、八一―九一頁、一九八九年、が詳しい。

- (2) 同論文、八九頁。

- (3) 『饗宴』の構成とその区分に関しては解釈の分かれるところではあるが、本稿では、172a-174a2まで、すなわち『饗宴』の始まりからアポドロロスが友人たちに当時の出来事を語り始めるまでを便宜的に「導入部」として考察する。BuryとRobinによる区分の比較については、浜下(前掲書、八四―八六頁)が詳しく紹介しているが、Buryは172a-174aまでを「序」として区分する。一方Robinは172a-178aまでを「序」とし、実際にアガトン邸でエロースに関する賛美演説が始まるまでの過程(アリストデモスとソクラテスの出会いからアガトン邸へ至るまで)をそこに含めている。

- Hunterは「Setting the scene」として172a-178aをまとめているが、172a-174aまでを「Telling the story」として別の節を設けて論じている点に、Buryに近づく。(R. Hunter, *Plato's Symposium*, Oxford, 2004.) 他方Taylorは172a-178aをまとめて「Introduction」として扱っている。(A. E. Taylor, *Plato The Man and His Work*, London, 1926, p. 211.)

- (4) 本稿での訳文は、朴一功訳『プラトン 饗宴／バイドン』西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇七年、に拠る。

- (5) *Symp.*, 173b9-c1.

- (6) 祝宴の参加者として、ソクラテスと共にアルキビアデスの名前が挙げられているのは、グラウコンの関心が、両者にまつわる「恋の話」にあるということ、つまり、哲学的なものというよりも大衆的な好奇心に基づいているということを示すと考えられる。

- (7) *Symp.*, 172b4-5.

- (8) *Symp.*, 173a-b.

(9) 自分が「みじめな存在であった」という主張と、それに続く「そう

今の君に劣らずね」というアポロドロスの言葉は、間接的にグラウコンが哲学について関心を持っていないことを窺わせる。

(10) 話の信憑性とは言っても、引用4終盤のアポロドロスの発言にも表

れているように、グラウコン自身は哲学とは無縁であり、その関心はアポロドロスの話の哲学的内容に関するものではないと考えられる。(註5および8、参照。) 浜下はアポロドロスの態度は「言葉を介して (dialogos) 真実に迫ろうとする dialektike を示唆しており、」他方でグラウコンを「情報通の俗人にありがちな、内容の真偽よりも「語り」さえ構成されて入ればよしとする」人物と解し、「後にディオティマ Diotima = Socrates によって提示される、¹⁾「俗人 [kairos]」と「ダイモンのな人 [daimonios tynē]」との対比 (202d-203a) を先取りしている。」と考える。(浜下、前掲論文、八四頁。) Nussbaum はグラウコンの関心は政治情勢に関するものだと推定している。(M. Nussbaum, "The Speech of Alcibiades: A Reading of Plato's *Symposium*", *Philosophy and Literature*, volume3, number2, 1979, pp. 131-172, p.135.)

(11) 註2を参照。

(12) Mitchell は、哲学の話を書くのは好きでも、本音では金儲けという我々読者が想定されているとみる。(R. L. Mitchell, *The hymn to Eros: a reading of Plato's Symposium*, U. P. America (Maryland), 1993.) Halperin は同様に「To be sure, Apollodorus's interlocutors are not seekers after truth... they are motivated not by philosophical *erōs* but by vulgar curiosity.” (D. M. Halperin, "Plato and the Erotics of Narrativity", *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, *Supple. vol.2*, 1992, pp. 93-129, p. 107.) Hunter もまた「素性のはっきりしない聞き手をソクラテスに関心はあっても、真剣に哲学者となる必要のない読者だと考える。そして、アリストデモスからアポロドロスを経て、名前のない聞き手へという連なりは、遠回しに、皮肉っぽくソクラテスからプラトン、そしてプラトンの読者という関係を表現しているという解釈を示している。(Hunter, op. cit. p27.)

(13) *Symp.*, 173c3.

(14) 引用8、参照。

(15) R. G. Bury, *The Symposium of Plato*, Cambridge, 1973 (1st ed, 1909), xvi.

(16) W. S. Cobb, *Plato's Erotic Dialogues*, New York 1993, p. 62.

(17) ただし、山本は「本稿とは異なる観点から両者の違いを強調している。山本によれば、アリストデモスが「自分の言葉」を語らない、解釈も恣意的選択もしない、記憶していることだけを話す人物であるのに対して、アポロドロスは何が重要かを自ら判断してソクラテスに確認し、「記憶に相応しいもの」(178a)を判断し、取捨選択し、「自分の言葉」で語りなおしている。「饗宴」の語り部として相応しい人物である。(山本巍、『プラトン饗宴 訳と詳解』、東京大学出版会、二〇一六年、一七七一八〇頁。)

(18) *Athenaeus, Deipnosophistai* 5, 217a.

(19) ソクラテスの生存 (ソクラテスの刑死は前三九九年) とアガトンのアテナイ不在 (前四〇五年までにはアテナイから去ったと考えられる。Bury は遅くとも前四〇八年頃までにはではないかと推定している。(Bury, op. cit. xvi.) に対する言及から、おおよそその期間中と推定される。) の問題については Nussbaum が詳しく論じている。Nussbaum はアルキビアデスの暗殺 (前四〇四年) という出来事までを考慮に入れた、その直前だという解釈を示している。(Nussbaum, op. cit. p136.) また、Hunter はアルキビアデスの死の前後と推定している。(Hunter, op. cit. pp. 4-5.)

(20) 引用5' (*Symp.*, 173a.)

(21) 引用5' (*Symp.*, 173a.)

(22) 「間接伝聞による報告という形式は、特に Glaucon の知識のあいまいさゆえに、改めて真の姿、即ち正しい Socrates 像の構築の必要性を意味している。」(浜下、前掲書、九〇頁。) 本稿では、この「正しい Socrates 像の構築」という問題に関連して、Socrates 像の探求という営みが「語り継ぐ」という行為のプロセスのうちにあることを論じる。

(23) 『饗宴』の執筆時期を推定する有力な手掛かりは182b5以下の「異邦人たちの支配のもとに暮らしている地域」という記述(前三八七／六年の「大王の和約」によるペルシアによるイオニア諸都市の支配の)ことを示すと考えられる。異論についてはH. B. Mattingly, "The Date of Plato's *Symposium*", *Phronesis*, vol.3, no.1, 1958, pp. 31-39." 1932以下における「ラケダイモン人によるアルカディア人の分裂」(前三八五年)に関する記述さらに、バイドロス演説の中(178e-179b3)での「恋するもの」と「恋されるもの」からなる軍隊への言及(おそらく前三七八年あるいはその直後に結成されたとされるテーバイの「神聖隊」が想定されている)である。これらに基づいてDoverは『饗宴』の執筆時期を前三八四から三七九と推定している。(K. Dover, *Plato Symposium*, Cambridge, 1980, p. 10.)

(24) *Symp.* 174a1-2.

(25) *Symp.* 178a3-6 「ところで、彼らのひとりひとりが語った内容のすべてを、アリストデモスがすっかり覚えていたわけではないし、ぼく(アポロドロス)の方も僕で、彼が語ってくれた事柄を何もかも覚えてはいるわけではない。けれども、彼がもつともよく記憶に留めていた事柄で、しかも印象深いとほくに思われたもの、そうしたものについて各人が述べているところを、君たちに話すことにしよう。」

また、180c4でも次のように言われている。「バイドロスはおよそ以上のような話を語ったと、アリストデモスは言ったのだが、さらにバイドロスの後には、何人かほかの人たちの話が続いたけれども、彼はその人たちの話したことをあまりよく覚えていなかったらしい。」

(26) *Symp.* 173b5.

(さとなか・しゅんすけ 文芸学 博士前期課程修了)